
偽名のアリス

神童サーガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偽名のアリス

【Nコード】

N4344F

【作者名】

神童サーガ

【あらすじ】

不思議な女の子と憐れな男の子の話。現実と仮想が入り交じります。最後はどうなる・・・？

「アリス・・・アリス・・・」

「んっ・・・眠いです」

どこかのセーラー服を着た女の子が、学校の屋上で昼寝をしてる。
女の子の頭上に、人語を話す鳥がいた。
鳥が言うには、女の子の名はアリスらしい。
アリスは、寝ぼけながら、返事をした。

「アリス・・・メール」

人語を話す鳥は、カタコトの日本語を話してる。
アリスは、起上がってパソコンを弄る。

「・・・ドーシタ？」

「・・・仲間がいるです」

アリスは、独特の喋り方をしてる。
甘ったるい子供の声だった。
鳥は、機械のような無機質な声。

「えっと・・・名前は、トーヤですか？」

パソコンに映し出されてたのは、黒い髪に黒縁眼鏡を掛けた地味な優等生だった。

名前、吹雪ふぶき 兔夜とつやらしい。

二人の名前だけならば、ルイス・キャロル作の有名な本の『不思議の国のアリス』を思わせる。

アリスの容姿は、フランス人形のような。金髪に深い青色の瞳。その容姿に、名前は似合ってるようだが、偽名なのだ。

偽名の理由は、至って簡単。本名が分からないからなのだ。育て親に貰った名なのだ。

「会いたいです」

ふああ、と欠伸をして、パソコンを閉じて教室に戻るアリス。

「トット・・・小屋に帰るです」

鳥の名前はトット。小屋というのは、アリスの家にあるトット専用の家。

トットは、窓からアリスの家に帰って行った。

「騎馬隊を率いてたのは誰だ？吹雪！！」

「総大将は、武田信玄です。ですが、部下の真田幸村が・・・」

「はいはい・・・もう良い。お前は理屈ばかり述べる」

生徒に不人気の先生。兎夜は、少し機嫌が悪くなり、眉間がピクピク動いてる。

「先生は、屁理屈ばかり述べるです」

「・・・なんだと？」

「逆ギレですか？いつでも教育委員会に訴えますです。貴方がしてること」

アリスが言った途端キレた。しかし、続いた言葉に、さっきまでと色が変わり焦り出した。

「今日はこれで終わる！！」

アリスの言葉を遮り、教室を出た先生。

「憐れです。情けないです」

「おいっ・・・アンタ」

話し掛けてきたのは、先ほど調べた少年だった。

「なんです？吹雪さん」

「兎夜で良い。アンタ・・・何してんだ？」

「私もアリスで良いです。貴方と同じことです」

アリスのセリフに驚いた表情をした兎夜。
アリスは、まだ眠そうだから心が読めない。

「トーヤ。移動です」

「あ・・・ああ」

教室で話してるので、怪しまれる。
二人は、空いてる教室に行った。

「私は、学園の事件を解決するために送られた……ASDです」

「アスド？」

アリスは説明した。

ASDとは、小さい頃から英才教育を受けて、裏から学園やその他を救う集団のことだ。

As scientific defense organization.

訳は、科学守備組織。

名だけはカッコいいが、実際にアリスしかいないため組織ではない。

「それで？」

「トーヤは、学校パソコンで色んなことしてるですね？」

核心を突いたのか動揺を隠せない兎夜。

「なんで……」

「学校内のサーバーに入れば分るです」

「おい・・・それって」

確かに犯罪です。よいこの皆さんはしてはいけませんよ？
これは、フィクションですので。

「ASDは、許されるのです。ただし、許容の範囲なら」

「なるほど・・・でも、俺にどうしろと？それで、俺を脅すのか？」

「いいえ」

ただアリスは、首を振っただけだった。

「協力してください」

「キミほどなら必要無いんじゃない・・・」

アリスの実力なら、確かに不可能は無いだろう。でも、それだけでは、無かったのだ。

「とある人物が、この学校にやって来るそうです」

「とある？」

勿体ぶるアリスに、イライラし出す兎夜。

「ここで何かの取引があるみたいです。内容までは知りませんが・・
」

「それを調べろって？」

ニコツと笑ったアリスに、溜め息しか出ない兎夜。
ここに、デコボコだが最強コンビが出来たのである。

「ところで何で今日なんだ？」

「知りませんです」

話をした日、当日に取引があつたみたいだ。
暗くなってから、学校に忍び込んで、今は応接室の隣りの部屋で、
聞き耳を立ててる。

『・・・・・
が・・・一番だな』

『・・・気持ちは良い』

『・・・円くらいでどうだ？』

何人かのオジサンの声がする。

「聞き取れないです」

「何か大事な物みたいだな」

更に聞いてると、一人がキレ出した。

『・・・バレたんだ！！どうしてくれる！？』

『それは、お前の不注意だ・・・ は、バレないように使え』

やはり大事な部分が聞こえなくて、意味が分らない。

『・・・変な匂いだって』

『使い過ぎだ！！』

『幻覚だって見える。』

が・・・』

ある人の言葉にピクツとする兎夜。

「乗り込むです」

「え!？」

飛び出した二人は、ガチャツと隣りの扉を開けた。
中にいたオジサン達は驚いた顔をしている。

「な・・・お前ら・・・」

「お前らは包囲され・・・て・・・る？」

勢いよく喋ったが、途中から力が抜けていった。

「なんだよ・・・これ・・・」

「・・・お前が何だ!？」

目の前に広がってるのは、眩しいオジサン達だった。
ブツはブツでも、可哀相な人達必須の物だった。

「カツラ・・・？」

そう、オジサン達はカツラの善し悪しを決めるために、夜な夜な集まっていたのだ。

「アリス・・・これは？」

「ふふ・・・引っかけましたね。ブツの取引をシャッターです」

写真を構えたアリスは、フラッシュをたきながら撮る。頭に反射して更に眩しい。

「な、ななな・・・」

「このネガを回されたく無かったら、私の言うことを聞くです」

この時、兎夜は自分が騙されたと漸く気付いたのでした。

「トーヤは相応しいです」

「騙された・・・」

「実は、これは練習で本番がこの後あるんです」

行きましょう、と兔夜の腕を掴んで歩いて行った。

細身のくせに腕力があるせいで、兔夜は抵抗出来なかった。

アリスがこの後、学校の裏の番長となったのは定かでは無い。

（後書き）

最後は、どうしたら楽しくなるかなと考えた結果・・・やっぱハゲ
ネタです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4344f/>

偽名のアリス

2010年10月28日06時56分発行